

タイトル：鹿児島からアメリカへの移民

学籍番号：2313074 名前：山下日世

■概要説明：

私は「外国人と鹿児島のかかわり」をテーマに、鹿児島から外国へ渡った人に焦点を当てた。私の親戚がアメリカへ渡っているため、外国の中でもアメリカへ渡った人に着目し、「鹿児島からアメリカへの移民」というタイトルを設定した。私は、なぜアメリカへ行く必要があったのか、アメリカでどのような職に就き、どのような苦労があったのかが気になったため、これらのことに着目し、実際に渡米している人にインタビューし、インタビュー対象者が経験したことを聞かせてもらった。インタビュー対象者は1962年に渡米し、現在は子供も孫もいる。そのため、インタビュー対象者の子供と孫にも、鹿児島に対するイメージと、親が渡米したことについてどう思っているか、祖父が渡米したことについてどう思っているかについてインタビューした。原稿作成時に苦戦したことは、言い方がわかりづらい所や、言葉の使い方を間違えている所があり、できるだけ多くの方が分かりやすいようにすることが難しかった。

■目的：

ゼミのテーマが「外国人と鹿児島のかかわり」であるため、外国とのかかわりを明確にするために、過去の鹿児島からアメリカへ移民した人について調べた。

■方法：

1962年に鹿児島から渡米した方とその子供と孫にインタビューした。インタビューはテレビ電話でお互いに顔を見ながら行った。

■結果とまとめ：

インタビューした結果インタビュー対象者が渡米した当時と今では永住権や市民権得る方法が違い、その他にも多くの苦労をしていたことが分かった。更に、インタビュー対象者の子供と孫は鹿児島に対して良いイメージを持っていて、親、祖父が渡米したことに対して肯定的であった。

2024年（令和6年度）プロジェクト演習

シティビューを利用する外国人観光客の現状

学籍番号：2313072 名前：村尾萌花

■概要説明：

私は、シティビューを利用する外国人観光客の現状について調べた。そもそもシティビューとは鹿児島の名所を回るバスのことであるが、その存在を知らない鹿児島の人も少なくない。調べた目的として、鹿児島を訪れる外国人観光客が鹿児島の交通をアクセスしやすいものだと思っているのか気になったからだ。また、自分自身シティビューを利用した経験があり、その際の乗客に外国人が多かったため、シティビューは外国人利用者を増やすための取り組みをしているのか気になった。これらの疑問を知るために私は実際にシティビューに乗り、乗客に話を聞いた。その結果、利用者はシティビューを利用しやすいと答えた人が多かった。また、鹿児島の観光振興課にもシティビューについて話を聞きにいった。そこではシティビューは外国人向けのバスではなく、鹿児島の人にも利用してもらいたいということかつくられたと分かった。

自分たちでバスに乗り、外国人に話を聞くことは、スマートフォンもあるため翻訳を使えば簡単であると考えていたが、実際にはインタビュー相手の警戒心を強く感じ、楽しいコミュニケーションにはならなかった。しかし、結果的にシティビューは外国人にとってもアクセスしやすいものであると分かった。また、外国人だけではなく県外から訪れた日本人も鹿児島の歴史を学ぶことが出来て楽しかったと答えていた。

パンフレットを作成するにあたり、同じシティビューについて調べた人がもう一人いたため、内容が被らないようにすることが大変だった。また、写真やイラストを使い、文字だけにならないように工夫した。

タイトル: 鹿児島市の姉妹都市(イタリア・ナポリ市)

学籍番号: 2313028

名前: 別府和

■概要説明:

私は「鹿児島と外国の繋がり」から、「鹿児島市の姉妹都市」というテーマで調査を進めた。鹿児島市と姉妹都市盟約を結んでいる都市の中でも、今回は盟約を結んでから一番歴史の長いイタリア・ナポリ市について調査した。姉妹都市になった経緯や行われている交流など、市としての取り組みを調べるため、鹿児島市役所に行き、国際交流課の方にインタビューを行った。テーマに沿って簡潔にまとめるため、インタビューで得られた情報の中から、より重要な情報を絞るよう意識した。次に民間としての取り組みを調べるため、ナポリ市で修業を積み鹿児島市でイタリア料理店を立ち上げられた方にインタビューを行った。「市としての取り組み」と「民間としての取り組み」の二つの視点からインタビューを行うことで、より多面的に姉妹都市について理解を深めることが出来た。工夫した点は、余白と文字間隔だ。見やすく均等であることを意識し、上手く余白を使うことと文字色を2色でまとめることで文をすっきり見せる工夫をした。

■目的:

「鹿児島市と外国の繋がり」を調査するため、市単位として繋がりを持っているのは姉妹都市だと考えた。市としての繋がりから民間の繋がりまで調査することを目的とした。

■方法:

鹿児島市役所へのインタビューとナポリ市と繋がりのある民間の方へのインタビュー

■結果とまとめ:

結果として、市としての取り組みは、青少年の派遣事業などを通じて、姉妹都市交流からお互いの文化に触れ異文化理解を深めている。民間としての取り組みは、食や音楽などを通じて鹿児島市に姉妹都市の文化を伝えることで貢献している。双方から話を聞くことで視点の違いや意識していることの違いを感じた。

タイトル：発展する鹿児島島の医療ツーリズム

学籍番号：2313012

名前：久保優衣

■概要説明

私は、鹿児島島の医療ツーリズムの発展について調査を行うため、鹿児島県指宿市に所在するメディポリス国際陽子線治療センターを見学した。

まず、医療ツーリズムについての説明を行い、現在ではインバウンドの1形態として捉えられていることなどを示した。また、メディポリス国際陽子線治療センターで実際に行われている陽子線治療の魅力や外国人患者の受け入れ体制、治療実績数についてまとめた。

分かった点は、陽子線治療を求めに中国やロシア、スペイン等多数の国から国境を越えて外国人患者が訪れているという点だ。作成する際に工夫した点は、文章に限らずインパクトを与えるため、実際に訪れた際の建物の外観や隣接しているホテルの内観の写真を中央に配置した点だ。外観の写真を中央に配置することで、どのような場所なのかを読者が想像しやすくなると考えた。また、展望台から見える景色の写真を掲載した。治療だけではなく鹿児島県指宿市の魅力や自然の中で体と心を癒すことが出来るということを伝えるためだ。

■目的

医療業界や経済の活性化として、医療と観光を組み合わせる医療ツーリズムは社会的に必要不可欠であり、深く調査したいと考えたため。

■方法

鹿児島県内で医療ツーリズムを推進している指宿市所在のメディポリス国際陽子線治療センターを見学し、実際にインタビューを行った。

■結果とまとめ

鹿児島県の発展する医療ツーリズムに基づき実際に調査してみて、メディポリス国際陽子線治療センターは最先端医療を行うだけの場所ではないと感じた。心身を癒すための運動施設やホテルが隣接しており、健康増進サービスを提供している。安心安全な治療を行いながら旅行という感覚で滞在を楽しむことが出来るのも大きな魅力の一つである。

タイトル：鹿児島市における外国人旅行客の受け入れ方法とは？

学籍番号：2313075

名前：山中智花

■概要説明：

私は、鹿児島市が運営しているシティービューについて調べた。そもそもシティービューが外国人観光客向けのものなのかどうかということについて、また鹿児島市と外国人旅行客のつながりがあるのかということを確認するために、鹿児島市役所の観光振興課に訪問した。観光振興課の方では、シティービューの目的と立ち上げた理由、シティービューの現状と今後の外国人旅行客に向けた取り組み、またシティービューは日本人向けなのかそれとも外国人向けなのかについても質問を行った。いずれも、シティービューは観光客が鹿児島市の観光拠点間を移動できる交通アクセスを向上させるものであり、シティービューは国内外を問わないということが分かった。

工夫したところは、色をはっきりと区別して誰もが見やすいような配置を意識して作り上げたことである。また、苦戦したところは実際にシティービューに乗車した際に思っていたよりも外国人観光客が乗車せず、インタビューを別日に設けたことである。(416字)

■目的：

ゼミの中で鹿児島市と外国人の関わりがあるのかどうかということを調べるために、自分でテーマを設定して実際に調べた。

■方法：

ある程度自分自身で調べてから、実際にシティービューに乗車し日本人と外国人の方々にインタビューを行った。そして鹿児島市役所の観光振興課に訪問し、インタビューを行った。

■結果とまとめ：

シティービューは国内外の観光客を問わないということが分かった。また、外国人旅行客に向けた取り組みも今のところは特にはなく、クレジットカードタッチ決済を取り入れるなどして、外国人旅行客でも利用しやすい環境作りを行っていることが分かった。

ウクライナの声

末吉美花

ウクライナ県人会

■概要説明：

2022年2月24日にロシアのウクライナ侵攻が開始されてから現在（2024年11月時点）まで継続されている（外務省より）。長引く戦況に日本も長期的な支援を行う必要がある。今回の調査では、鹿児島に滞在しているウクライナ避難者を対象に、鹿児島に避難するに至った経緯や実際に避難者の様子取材する。また、ウクライナ避難者を支援する団体、市の取り組みなども調べる。それらを基に、今後のウクライナ避難者への支援がどうあるべきかを考えていく。

■目的：

鹿児島県内に住むウクライナ人と県内の支援者について取材し、その結果からウクライナ避難者の本音や今後のウクライナ支援について考察する。

■方法：インタビュー調査、イベント参加、インターネット調査

■結果とまとめ：2024年10月9日にウクライナ県人会に参加。その取り組みで、県人会主催者でもあり、フードバンクセンターの理事でもある村上光信さんとコンタクトを取る。また、その場でウクライナの方と繋がり、今回のプロジェクト演習の取材をメールで行った。さらに、鹿児島市役所の国際交流課の方と連絡を取り、現在行っているウクライナ支援についてお話を聞くことが出来た。

取材結果から、ウクライナ侵攻についてニュースで見る機会があったが、他人事のように感じていた。それは、時間を経るとより一層私たちの日常から遠いものであるように感じられる。しかし、今回ウクライナの方々避難民や支援者を取材していく中で、ウクライナ侵攻は未だに解決していない問題であることを認識させられた。ウクライナ侵攻が長期化する中で、私たち自身の関心が徐々に薄れていくように、日本へ避難してきた人々も長期化する避難生活に”いつまで続くのか”という疲労が言外に感じた。

私たちは、来日したウクライナの方々に支援を提供すれば良いと考えていた。だが、ウクライナ避難者は自立心があり、与えられるだけでなく、持続的に生活したいと考えているように接していく中で実感した。継続的に与えられる物質的な支援も不必要とは断言できないが、彼らには“困ったときにだけ頼りにしたい、気軽に相談したい窓口”が少ない。私たちが、もし海外で長期に渡って避難する状況を想像すると、物質的な支援だけでなく、困ったときに少しでも手を借りられるような支援が必要ではないかと考えた。

今回の調査・取材では、調査期間が短かったこともあり、2、3名のウクライナ避難者しか取材できなかったが、ウクライナ県人会では高齢の夫婦や職場で翻訳機を使って仕事をしている避難者の方もいた。県内で働いている避難者などの取材も今後できれば良い。

ウクライナ県人会（本人撮影）

■文献：出入国在留管理庁

2024年11月24日閲覧 ウクライナ避難者数

https://www.moj.go.jp/isa/support/fresc/01_00234.html



2024(R6)年度 プロジェクト演習

鹿児島女子短期大学 教養学科 黒川ゼミ

タイトル：賃貸住宅における外国人居住者の現状

学籍番号：2313040 名前：石塚奈々心

■ 概要説明

私は、外国人と居住の関係について、居住する際の課題と現状また、外国人を受け入れる賃貸仲介会社側の対策やメリットについて調べた。まず、鹿児島に住む外国人には働くことを目的とした居住者が多いことを知った。しかし、居住するにあたって貸主によって受け入れ態勢が異なり、また、自治体によっても県や市全体の取り組みや支援が行き届いていないことが明らかになった。賃貸物件を探す際に、県や市または自治体での取り組みの情報が多く、統一性がないことが外国人には理解しにくいと考えた。賃貸仲介会社側の対策として文化の違いを借主、貸主ともにお互いを理解することがルールや価値観の相違をなくそうと取り組んでいる。また、働くことを目的とした外国人だけではなく、鹿児島に住むことを目的とした外国人の増加に期待することができる。日本文化を好む外国人にとって和室が多い空き家は利点となり、有効活用できることから外国人居住者の増加が鹿児島の空き家対策に繋がっていくと考えた。

■ 目的

鹿児島に住むことを目的とした外国人にどのような問題が直面し解決していくのか、また賃貸仲介会社や自治体、貸主の外国人を受け入れる体制を明らかにする。

■ 方法

オーリック不動産の賃貸仲介営業の方にインタビューをする。

インタビュー内容

- どのくらいの賃貸住宅が外国人の受け入れ態勢をとっているのか。
- 賃貸仲介会社側が取っている対策
- どのようなトラブルが起きるのか。
- 外国人が日本に住むことのメリット

■ 結果とまとめ

外国人が日本に居住する上で一番の課題は文化の違いであり、外国人が文化の違いを理解できるような取り組みと対策をしていることが分かった。どのくらいの賃貸住宅が受け入れ態勢をとっているのか詳しいデータはないが、鹿児島に住む外国人は国勢調査の傾向的に増加すると考えることができるので、受け入れ態勢をさらに整えていくべきだと考える。

タイトル：鹿児島に住むミャンマー人特定技能生の声

学籍番号：2313060

名前：野元優梨香

■概要説明：

私は、プロジェクト演習で「鹿児島と外国のつながり」をテーマに「鹿児島に住むミャンマー人特定技能生」について調査した。

まず、ミャンマーの基本情報についてインターネットで調べ、まとめた。基礎知識を得たところで、鹿女短のミャンマー人留学生に、知人を紹介してもらい、ミャンマー人のニンさんにオンラインでインタビューを行った。ミャンマーから鹿児島に来た経緯、民主化運動について、ミャンマーの文化と日本の文化の違いについて詳しく聞くことができた。最後に、インタビューの内容をもとに、自分が本当に伝えたい情報をまとめ、文章を簡潔にした。

工夫したところは、ミャンマーの国旗カラーを使い見やすいデザインにした点と、基礎知識がない人が読んでも理解できる文章にした点である。苦労したところは、インタビューで幅広く聞きすぎてしまい論点が途中でずれてしまった点と、クーデターなど複雑な問題を適切な言葉で表現する点である。

外国人へのインタビュー調査を通して、相手の文化的背景を理解した上で、外国人と話しをすることで良好なコミュニケーションが取れると学んだ。



鹿児島に住むミャンマー人特定技能生の声

【ミャンマーの基本情報】

ミャンマーは東南アジアに位置し、面積は日本の約1.8倍、人口約5,417万人（2022年）。多民族国家であり、135の民族が存在し約9割が仏教徒で、僧侶に対しては深い敬意を表す特徴がある。公用語はミャンマー語で、日本語と文法が似ているため日本語学習者が多い。国名では「ミャンマー」が全民族を表す中立的な言葉として現地人には多く使用され、「ビルマ」は特定の民族を指す際に使用される。首都は2006年に「ヤンゴン」から「ネピドー」に移転。現在は、クーデターなどによる情勢不安や資金水準の低さが課題で、国外での就労希望者が増加している。

【インタビュー者紹介】

インタビューをしたのは、ニン・エンダレーキンさん22歳女性。出身地はミャンマーのヤンゴンで、父・母・弟と4人で生活していた。現在は出水市に住んでいる。ニさんは、来日前ミャンマーのヤンゴンにあるダゴン大学で物理学を学んでいたが、クーデターが始まり大学2年生から大学に行かなくなった。大学休学中に、ミャンマーで日本のアニメ「君の名は」がきっかけで「日本語の発音、可愛いな自分も話してみたい」と思い日本語の勉強を始めた。親戚の仕事の手伝いをして、日本に行く費用を稼いだ。大学卒業後日本に住む予定だったが、ミャンマーでの大学通学がクーデターにより困難になったため、早めに来日することが決まった。両親も日本に行くことに賛成であった。2022年4月に来日し、いちき串木野市にある神村学園日本語学科で1年間、日本語を勉強した。介護の在留資格に合格し、現在は出水市にある病院で介護士として働いている。



ニン・エンダレーキンさん(ニンさん撮影)

【日本の中でも鹿児島に来た経緯】

ニさんは日本に住めるのであればどこでも良かった。面接をしたのが偶然鹿児島の会社だった。鹿児島について調べるうちに、桜島や海など自然豊かで鹿児島に行きたいと思った。1回目の面接で合格し、鹿児島以外は面接はしていないようだ。

【民主化運動について】

ニさんは、民主化運動に同情的である。民主化してほしい理由としては、自分の意見を自由に言える、やりたいことが自由にできるからである。民主主義国家である日本に住み、民主主義を最も感じた瞬間は、学生の時に皆ながら、自分のやりたいことを自分で決めて取り組んでいる家を見て、本当にすごいと感じたそうだ。これは民主主義でないといけないことと思った。また、仕事において、日本人は上司など目上の人であっても自分の意見を伝えることができるのが良い雰囲気だと思った。

【日本の文化で好きな所・苦手な所】

1番好きな日本の文化は、ご飯を食べる前に「いただきます」食べた後に「ご馳走様」を言うのが命に感謝をしており素敵である。ミャンマーではこのような文化はない。また、日本の茶碗を手で持つのが食べやすく良い。ミャンマーでは茶碗を持って食べるのがマナーが悪いとみなされ、テーブルに置いて食事をする。苦手な日本の文化は、有名飲食店などの行列。日本人はイライラせずに待つことができるのは凄いことだと思う。

【ミャンマーの文化の好きな所】

1番好きなミャンマーの文化は、寝る前、大事な仏教のお祭りの時など、自分の両親、祖父母に拝み感謝を伝える所。悪いことをしても「許してください」と拝む。

【将来について】

将来的には大好きなミャンマーに帰りたい。日本に来日してから1度もミャンマーには帰れていないそうだ。そして、日本語をもっと勉強して日本語の通訳者になりたい。クーデターが終わり、観光客が訪れるような平和な国になってほしい。ニさんは母国であるミャンマーの素晴らしい文化を外国人にシェアしたいと話してくれた。

【インタビューから考えたこと】

ニさんはインタビューで、新しい環境での生活や文化の違いなどについて素直に話してくれた。特に、日本の文化を受け入れつつ、ミャンマー人という自身のアイデンティティを大切にしている姿勢が印象的であった。現在、ミャンマーではクーデターが起こっているが、そのような中でも将来に向けての展望も重要だと感じた。日本語通訳者を目指しているニさんのような人がミャンマーと日本の架け橋になるだろう。そして、異なる文化が共存し、互いに学び合うことの重要性を伝えてくれるのではないかなと思う。

作成者 野元優梨香